

国内事例5 ●木曾川

①現状の把握（歴史の変遷も含む）

木曾三川下流部は、1700年頃まで木曾・長良・揖斐川が編み目状に入り組んで流れていた。宝暦治水や明治改修などの大改修で現在の流路となり、整理・整正されてきた河川である。

河川工事、堤防整備等により、特に水際域を中心に生物生息環境の減少が進み、生物生息環境のなかでも特殊な環境であり、独特の生態系が形成される干潟やヨシ原の減少が目立つ結果となった。流域住民等からも、広いヨシ原や干潟等、そこに生息する生物を回復して欲しい、昔のような風景をつかっていきたいなどの要望が出されている。

②目標設定

治水、利水上の整備を迫られた背景を鑑みると、河川改修前の自然環境を取り戻すことは困難であることから以下の目標を設定した。

長期目標：現在残存する自然環境を極力保全

- 自然干潟やヨシ原の保全
- ケレップ水制（ワンド）の保全

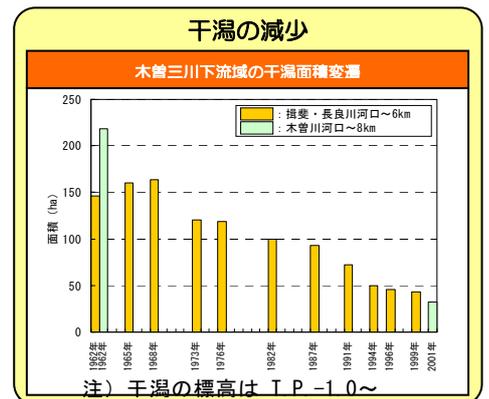
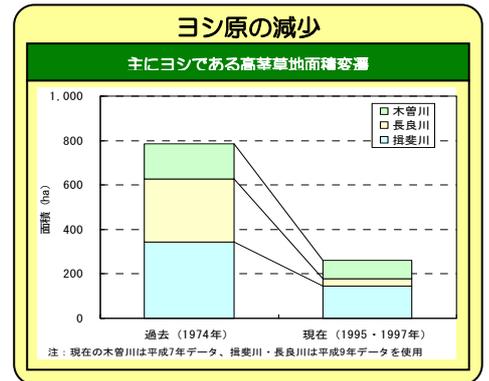
当面の目標：洪水が安全に流下するのに影響のない範囲での自然環境の再生

- 本来の自然環境の有する機能（生物多様性、生物量・漁獲量、親水、水質浄化）の発揮
- 管理・モニタリング等

③取り組み

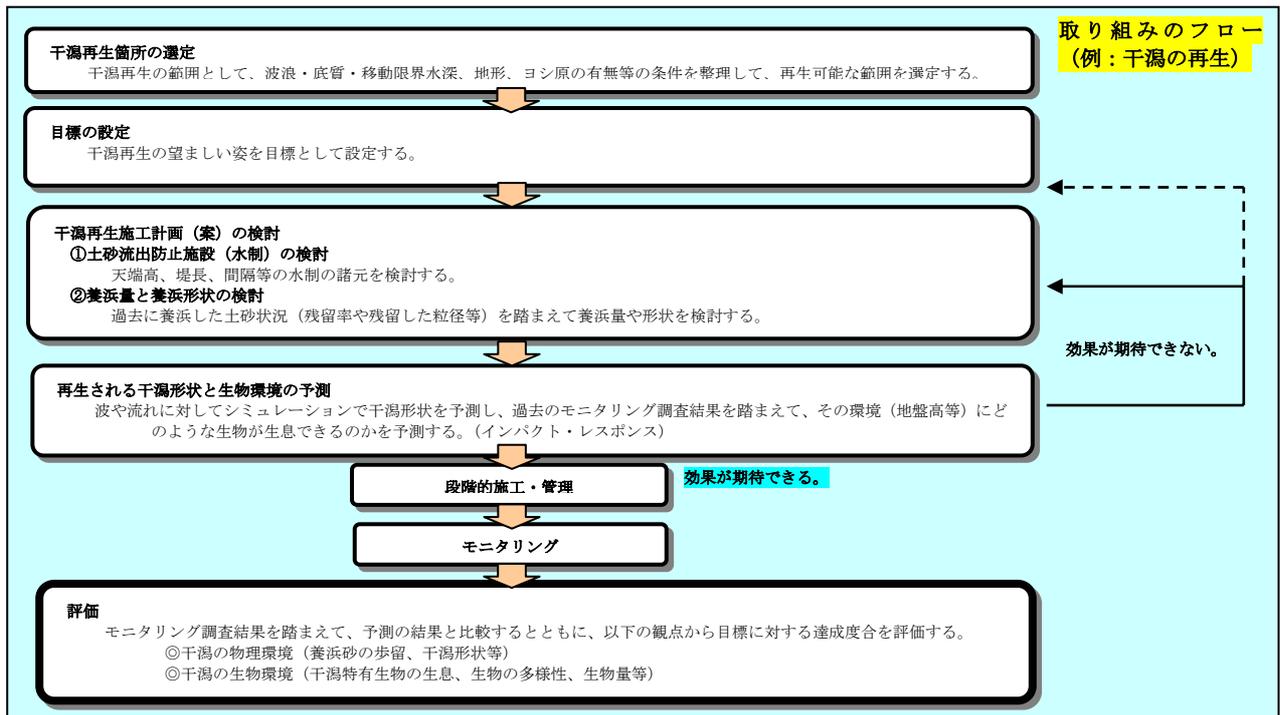
干潟の再生、ヨシ原の再生・保全、自然環境の保全について、事前調査（整備箇所の選定含む）→目標の設定→施工計画の検討→予測→施工→モニタリング調査→結果の評価という手順により、自然の反応を把握し、その状況に応じて計画の内容にフィードバックしながら、順応的・段階的に整備を行っている。

河川工事、堤防整備等



○取り組み内容

区分	整備方針	整備のポイント
干潟の再生	① 減少した水生生物、植生等の多様な生態系の再生 ② 潮干狩り、水遊び等の多目的なレクリエーションの場の再生 ③ 自然観察空間の創出	◇ 養浜方法については、底生生物への影響を緩和するため、風・波・潮汐等の自然の力によって徐々に干潟が形成されるように、土砂投入は数回に分け、護岸前面に盛土を行う。 ◇ 養浜の砂には同じ河川内の砂を用いる。
ヨシ原の再生・保全	ヨシ原の再生 ① 減少した水生生物、植生等の多様な生態系の再生 ② ヨシ原景観の再生 ヨシ原の保全 ③ 良好な状況で残存するヨシ原の保全	◇ ヨシ原の基盤工等では極力自然の素材を用いる。 ◇ 周辺の田園風景や水郷景観を配慮し、横断的・縦断的連続性を確保したヨシ原景観を創出する。 ◇ 残存する自然のヨシ原を保全することとし、河川整備に際しては整備する護岸の前面に極力残すなど、そこに存在した連続性のあるヨシ原の生態系を配慮しつつ保全する。
自然環境の保全	ワンドの保全 既存のワンドの保全による水生生物の多様な生態系の保全 貴重植生の保全 木曾三川における貴重な植生の保全	◇ 既に存在するワンドのハビタットとしての機能を向上させる保全とする。 ◇ 生物におけるワンド利用を踏まえて、整備・補修していく。 ◇ 木曾三川下流域において貴重な植物であるタコノアシ、フジバカマ、イセウキヤガラ等の一部の場所に移植しており、それらを取り巻く環境も含め保全する。



④モニタリング・評価

取り組み内容のモニタリングについては表のような項目について定期的に行っている。

整備内容	調査項目	
干潟の再生 (渚プラン)	物理的安定性	地盤高、底質の粒度組成
	生物生息環境	水質、底質
	生物の生息	底生生物、魚介類、鳥類
ヨシ原の再生	物理的安定性	地盤高、底質の粒度組成
	生物生息環境	水質、底質
	生物の生息	ヨシの生育、底生生物、魚介類、陸上昆虫類、鳥類、両生類・爬虫類、哺乳類
ワンドの保全	ワンドの現状把握	植物相、ワンド形状
	生物生息環境	水質、底質
	生物の生息	底生生物、魚介類、陸上昆虫類、鳥類、両生類・爬虫類、哺乳類、植物
貴重植生の保全	貴重植生の生育	植物

⑤合意形成

